

令和 2 年度

横浜市立高等学校  
及び  
併設型中学校  
自己評価書

横浜市立横浜商業高等学校

## <学校情報>

1 課程・学科 全日制課程 商業科・スポーツマネジメント科・国際学科

2 学校長 小間物 晃弘 (令和3年4月1日現在 在職1年目)

### 3 学校教育目標

本校は学則に則り、後期中等教育およびビジネス教育・国際理解教育を行い、他を尊重し自立精神を持つ個を育み、将来の社会人としてビジネス社会を理解し、問題解決能力と国際的視野を持つ豊かな人間を育てることを目標とする。

#### ○商業科教育目標

生徒一人ひとりの能力に応じた個性を尊重し、経済のサービス化・グローバル化・ICTの急速な発展や地域産業の振興など起業家精神を身に付けた人材の育成及び職業人としての倫理観・遵法精神などの育成のため、力強く生きることができる資質を、体験的・実践的な活動を含めながら高め育てる。

##### ●重点目標

- ☆ビジネス等の実社会で役立つ将来のスペシャリストやリーダーを育成する。
- ☆地域に貢献する即戦力としての人材を育成する。
- ☆教科指導や特別活動・部活動を通して全人教育を行う。

#### ○スポーツマネジメント科教育目標

スポーツや健康に関する学習や実践的な活動を通して、科学的な知識・理解を深めるとともに、スポーツとそのマネジメントにかかわる能力を育てる。

##### ●重点目標

- ☆地域における生涯スポーツ振興の担い手づくりと横浜におけるスポーツの活性化に貢献する人材を育成する。
- ☆グローバルな視野をもってスポーツや健康分野におけるビジネスの振興発展に貢献する人材を育成する。
- ☆将来の社会的・職業的自立に向けた資格や技術を習得した人材を育成する。

#### ○国際学科教育目標

自主自立の精神を培うとともに、国際感覚、異文化間コミュニケーション能力及び問題解決の方法を身に付け、国際社会で世界の人々と共に生きる力を育てる。

##### ●重点目標

- ☆国際社会で共に生きるために、自己及び自国の文化を深く認識し、かつ多文化共生の姿勢をもてるよう国際感覚を育てる。
- ☆異なった文化の中でも積極的にコミュニケーションできる能力を育てる。

☆多様化する国際社会で主体的に行動するため、自ら問題を発見し整理し解決方法を追求しつづける能力を育てる。

☆教科指導や特別活動・体験実践活動を通して全人教育を行う。

#### 4 教育方針

- 生徒の主体的な学びを支援し、「活力」「魅力」ある学校づくりを推進する。  
生徒の興味・関心・意欲の向上を目指した指導方法の工夫を行い、わかる授業に取り組み、一人ひとりの生き方を踏まえた進路指導を推進し、課題解決能力の育成を図る。
- 新たなビジネス教育（経済のサービス化・グローバル化や ICT への対応、起業家精神の育成、職業人としての倫理観）や世界の人と共に生きる力を育てる国際理解教育を推進する。国際的な視野に立った先進的なビジネス教育やコミュニケーション能力を身に付けた国際社会に貢献しうる人材を育成する。
- 学校評価を実施し、絶えず問題意識を持って、学校教育改革を推進する。学校評価委員会を活用し、P 計画・D 実行・C 振り返り・A 行動 のサイクルで改善を継続する。
- 第3期横浜市教育振興基本計画に沿って教育改革を推進し、Y校における商業科、スポーツマネジメント科及び国際学科のより一層の発展を目指す。学力の全体的な底上げを図り、一人ひとりの力を最大限に伸ばし、進路実現に繋げていく。

#### 5 教職員数（令和2年12月1日現在）

学校長 1 校長代理 1 副校長 2 事務長 1  
教諭 66（男 45、女 21） 養護教諭 2  
実習助手 1 事務職員 4 技能職員 3  
A E T 1 非常勤講師 17 管理員 6  
(防災員2名含む)

#### 6 生徒在籍数（令和2年12月1日現在）

年次（学年）	学級数	男子	女子	合計
1	7	111	164	275
2	7	98	175	273
3	7	111	161	272
合計	21	320	500	820

## 7 回収率

		依頼数	回答数	回収率
教職員		78	76	97.4 %
生徒	1年	275	273	99.2 %
	2年	273	255	93.4 %
	3年	272	189	69.5 %
	合計	820	718	87.6 %
保護者		820	657	80.1 %

## 8 自己評価実施日

教職員	令和2年12月14日～令和3年1月29日
生徒	令和2年12月16日～令和3年1月29日
保護者	令和2年12月8日～令和2年12月25日
地域	令和3年3月25日

## 9 集計・分析期間

令和2年12月9日～令和3年4月30日

## 10 自己評価書の公表方法・時期

学校ホームページ上で、令和3年6月以降に発表の予定。

## <自己評価>

### 1 第3期横浜市教育振興基本計画の推進状況

#### □魅力ある高校教育の推進状況

##### <商業科>

(関連アンケート番号：教職員 1, 4, 5, 6、生徒 1、保護者 1, 2, 6, 10)

取組	<ul style="list-style-type: none"><li>・個性を伸ばす専門教育の推進を目指し、検定上位級取得による専門性の深化に取り組んだ。</li><li>・高大連携や産学連携による取り組みを積極的に行った。</li><li>・各種ビジネスコンテスト等への参加についても積極的に取り組んだ。</li><li>・専門学校との連携により、日商簿記検定や販売士検定合格に向けての特別講座を実施した。また、公務員志望者に対しては公務員受験講座を開設し、民間企業志望者に対しては就職マナー講座を行った。</li><li>・資格取得を目指すとともに、地域との連携を図り地域貢献し活躍できる人材を育成することを目的の一つとして、2年生の授業「課題研究」を行った。例年行っている形での課題研究発表会はできないが、1年間の研究を通して、よりよい成果を上げることができた。</li></ul>
成果	<ul style="list-style-type: none"><li>・3年生の全国商業高等学校協会1級3種目以上合格者は、38名（1級8種目1名、6種目1名、5種目5名、4種目15名、3種目16名）であった。教科全体として、授業以外での検定対策や補習を実施した成果が表れたと考える。</li><li>・「課題研究」における実践例として、東洋大学国際観光学部と連携した架空の株式会社組織による活動を行った。</li><li>・高大連携による取り組みとして、関東学院大学、東洋大学、横浜市立大学と積極的に連携をとった。</li><li>・YBC2年「課題研究」の授業においては、令和2年度は関東学院大学と毎日教育総合研究所との産学連携により、「ニュース時事能力検定の普及」というテーマに取り組む、そのアイデアを提示し講評をいただくという企画を行った。</li><li>・各種ビジネスコンテスト等への参加については、「総合実践」のなかで日本政策金融公庫主催の高校生ビジネスプラングランプリの応募に取り組んだ。</li></ul>
課題	<ul style="list-style-type: none"><li>・家庭学習の時間が取れていない生徒が多いことが課題である。長期的な計画に基づく学習習慣がない。</li><li>・今後の大きな課題となる「地域との関わり」が余り進んでおらず、「地域課題」を明らかにするなどの活動が必要となる。</li><li>・コロナ禍で明確になった自宅と学校とを結ぶ機会を高めるために、生徒が自宅などで学ぶことができるICT機器の提供およびその活用法の構築や、ソフト面の充実が必要である。</li><li>・「課題研究」授業の更なる充実を図ることが必要である。</li></ul>
改善策	<ul style="list-style-type: none"><li>・入学時から家庭学習の習慣を身に付けさせる。そのために、資格取得を奨励し、3年間を見通しての資格取得計画を明示していく。難関資格対策として、放課後や朝を利用した複数教員による補習や商業分野の部活動組織の見直し、設置などを教科全体で検討していく。</li><li>・授業の中で課題に対してやりきることを習慣づけさせる。</li><li>・さらに実践室を多目的に利用できるような環境にし、個別学習やグループワーク、各種検定対策などを効率的に実施できるような環境づくりを行っていく。</li></ul>

## 〈スポーツマネジメント科〉

(関連アンケート番号：教職員 1, 4, 5, 6、生徒 1、保護者 1, 2, 6, 10)

取組	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ スポーツ科学・YSMP・課題研究の授業では、外部のスポーツ業界、スポーツビジネス業界の方々に協力していただき、講演会や体験会などを頻繁に行っている。</li> <li>・ コロナの影響で2年生のインターンシップやロサンゼルス研修旅行が中止となってしまったため、代替行事等を検討している。</li> <li>・ 3学年副担任を進路指導担当者とし、進路指導の充実を図った。</li> <li>・ 定期的に各クラスで学級通信を発行するとともに、HPにおいて随時取り組んだ内容を発信するよう努めている</li> </ul>
成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 日常的に得られる知識を基礎として、講演会や講習、現場実習などを行うことにより、スポーツ業界に携わるということがより現実的に考えられているため、明確な進路選択・進路実現が行われている。</li> <li>・ 5期生では、体育系・経済経営系の進路選択をする生徒が多いことから、商業科のなかの一クラスであるということで商業に関する科目を継続的に学びたい生徒が多い。</li> <li>・ 担任の指導が行き届き、生徒に応じた受験方法で進路を決定させた者が多い。</li> </ul>
課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 部活動や校外のクラブチームで活動しているものがほとんどなので、休業日での活動については指導者から理解が得られるように努めていくことが課題である。</li> <li>・ 大学進学を考えた生徒がふえてきたので、さらに行きたい進路を実現させるための指導を行いたい。</li> <li>・ 保護者に対して学校の様子が伝わらないことが多いようなので、引き続き、検討が必要である。</li> </ul>
改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 大学進学を見据えて、各学年で小論文講座等をYSMPや授業に取り入れて行く。</li> <li>・ 特別講義や学科行事など、生徒の活動状況を保護者にも見てもらえるよう、講義や行事の記録をできる早くHPにアップできるよう人を配置し的確に実行して行く。</li> </ul>

## 〈国際学科〉

(関連アンケート番号：教職員 1, 4, 5, 6、生徒 1、保護者 1, 2, 6, 10)

取組	<ul style="list-style-type: none"><li>・新教育課程でうたわれている「主体的、対話的で深い学び」を国際学科の教科の中で意識をしている。特に総合的な探究の時間においては、協働学習から個人探究を行い、テーマに関連する専門家の前で発表している。</li><li>・ICTを利用した取り組みを実践し、臨時休業下での非同期型オンライン授業や総合的な探究の時間でのプロジェクト型学習、学科行事において活用している。</li><li>・進路指導においては、大学共通テストの初年度でもあり、かつ総合型選抜・学校推薦型選抜においてもプレゼンテーションやディスカッションが重視され、これまで以上に進学先の研究を細かに行っている。</li></ul>
成果	<ul style="list-style-type: none"><li>・生徒は、課題発見、問い立て、仮説、検証、発表のプロセスを体感し、関係性の成熟がより深い探究をする上で重要なことを理解できた。</li><li>・ICTを継続的に利用していたことにより、オンラインによる外部試験を実施することができた。</li><li>・外部検定試験への関心は高まった。また、大学研究もアドミッションポリシー、ディプロマポリシー、カリキュラムポリシーを研究するようになった。</li></ul>
課題	<ul style="list-style-type: none"><li>・教員がどこまで介入すべきか、伴走者としての立ち位置の難しさに直面した。主体性や深い学びをどう評価に結び付けていくのかが課題である。</li><li>・すべての家庭が同じデバイスやアプリを持っているわけではなく、何ができるのか手探りの状態である。学校で使用する予定のアプリは統一したほうがよい。</li><li>・総合型選抜、学校推薦型選抜に依存する傾向は依然としてあり、一般型選抜も含めた幅広い進学を選択を事前に考えておきたい。</li></ul>
改善策	<ul style="list-style-type: none"><li>・新教育課程施行を前に、教科横断型で授業を展開することも視野に考える時期にある。特に教科探究において思考する時間の確保が重要であり、どのように確保するかを検討する。</li><li>・令和3年度から校内Wi-Fiを活用した授業展開の教材開発が求められるため、これをきっかけに家庭でできることと学校でしかできないことを考えて計画し、実践していく方法を検討する。</li><li>・進路キャリアガイダンス部と連携し、3年間を見通した進路計画を立て直す必要がある。3年次の進路決定から逆算し、2年次にすべきこと、1年次にすべきことを整理し、保護者も含めて情報共有を行う。</li></ul>

## 2 教育活動の状況

### □教育課程の状況

(関連アンケート番号：教職員 2,3、生徒 1、保護者 2)

〈教務部〉

取組	<ul style="list-style-type: none"><li>・商業科、スポーツマネジメント科、国際学科の特色をふまえた、教育課程の編成・実施を行った。</li><li>・生徒の実態を把握し、生徒が主体的に選択できるように選択科目の指導を行った。</li><li>・多様な進路実現にむけた教育課程・教育内容の改善を図るため、教育課程の効果的運用を図った。</li><li>・新カリキュラムの完成にむけて、ワーキンググループや教育課程委員会を開催し具体的に編成を行った。</li></ul>
成果	<ul style="list-style-type: none"><li>・「希望する進路に進むために必要な科目や興味・関心を満たす科目が設定されている」（生徒 1）は、昨年度から 2 ポイント程度増加している。また、「本校のカリキュラム（教科・科目構成）は、生徒の進路実現に役立っている」（保護者 2）についても、3 ポイント程度増加した。</li><li>・令和 2 年度は、新型コロナウイルスの影響もあり、選択科目調査は 1 回で実施したが、例年通りに滞りなく行うことができた。</li><li>・令和 4 年度からの新カリキュラムを完成させた。</li></ul>
課題	<ul style="list-style-type: none"><li>・新カリキュラムの完成に伴い、シラバス作成のために授業内容や評価規準について、学校や教科で検討する必要がある。</li><li>・閉講講座がいくつか出ているため、生徒の希望通りに科目選択ができない状況が続いている。</li></ul>
改善策	<ul style="list-style-type: none"><li>・教科会で新カリキュラムのシラバスについて検討していただき、教育課程委員会で情報提供や情報共有をおこなう。</li><li>・選択科目について教育課程委員会で精査し、教科と選択科目の設定について協議を進める。</li></ul>



## □教科指導の状況

(関連アンケート番号：教職員 4, 5, 6、生徒 1、保護者 1, 2)

### 〈国語科〉

取組	<ul style="list-style-type: none"><li>・感染症対策を講じつつも、生徒が主体的に授業に取り組めるような工夫を行った。</li><li>・プロジェクター等の機材を活用した授業を行った。</li><li>・国語表現においてそれぞれの習熟度や進路希望を考慮したクラス分けや授業を展開した。</li></ul>
成果	<ul style="list-style-type: none"><li>・グループワークを控えたかわりに、作文などの書く力をつけることを重点的に行うことができた。</li><li>・プロジェクター等で漢文や古文の原文を表示し、そこに書き込むことで、分かりやすい授業を展開できた。</li><li>・国語表現では進路別のクラス編成を行い、少人数での授業を展開することで、文章表現力を向上させ、進路実現のための実践的な力も身につけさせることができた。</li></ul>
課題	<ul style="list-style-type: none"><li>・大学の一般受験に対応できる国語力を広く身に付けさせていくこと。</li><li>・希望する進路に向けた作文能力と思考力の育成。令和2年度は休校の影響もあって1学期で文章表現の基本を身につけることができず、進路や希望する学科に対して自分の考えを深めることが難しかった。</li></ul>
改善策	<ul style="list-style-type: none"><li>・感染症対策を講じながら、話す・聞く力をどのように育成していくのか考える。</li><li>・文章表現の基本を大事にしつつ、生徒が自分自身について考える時間をつくり、物事に対する考え方を培う。また、その考えを表現できる文章作成能力を育てる。</li></ul>

### 〈地歴公民科〉

取組	<ul style="list-style-type: none"><li>・教科書の内容を中心に、基礎的な知識を習得させるとともに、多面的な視野が持てるように考察する際の的確な根拠、資料を活用して授業実践を行った。同一科目を複数の教員で担当する場合は、試験問題や授業進度、評価などについて情報共有するように努めた。</li><li>・大学受験に対応できるように、課題プリント・対応プリント等、難易度を考慮した多様な資料を使って授業を行った。</li></ul>
成果	<ul style="list-style-type: none"><li>・生徒の授業評価はおおむね肯定的であるが、授業目的が単なる知識習得ととらえて、多面的な視野を持つことの重要性について理解が進まない生徒も中にはいる。また、進路が決まった後の生徒の授業に対するモチベーションを高める授業改善を図ってきたが、少しずつ成果は表れ始めている。</li></ul>

課 題	<ul style="list-style-type: none"> <li>教科書程度の基礎的知識の定着や、より主体的で多面的な視野の習得が求められる。また、「倫理」や、商業科の生徒は受験に対応できる「B」科目を学べる機会がない点が問題視されていたが、新課程の実施に向けて改善される方向で議論が進んでいる。また、進路決定後の生徒のモチベーションを高めることも継続課題の一つである。教材開発、身近な地域教材などの活用、実物資料の活用等を実践していく必要がある。今後も授業改善を進めていくとともに、新課程に向けて大学受験にも十分対応できるカリキュラム（特にB科目）の効果的運用を考えていく必要がある。</li> </ul>
改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>主体的・対話的で深い学びになるように、生徒が自らの理解の状況を振り返り、自分の考えをまとめて意見表明をする機会を授業の中でより多く持つ必要がある。ICT機器などの活用を通して、基礎・基本の定着と進路開拓につながる発展的な学習を両立していくことが求められている。新教育課程の実施に向けて本校の生徒実態に合った新しい教育課程を創造していくことが肝要であり、今後も検討を進める。</li> </ul>

### 〈数学科〉

取 組	<ul style="list-style-type: none"> <li>教科書の内容を中心に、継続して主体的・対話的で深い学びの実践が行えるような授業展開に取り組んだ。</li> <li>3年生では必修の数学Ⅱの2クラスを3分割し、きめ細やかな指導を行った。</li> <li>令和2年度当初、登校自粛期間に学習内容の動画配信を行い、自宅学習支援を行った。</li> <li>観点別評価本格化に向け、各観点毎の評価を取り入れた課題の設定や授業展開を実施した。</li> </ul>
成 果	<ul style="list-style-type: none"> <li>2クラスを3分割することにより、内容理解が深くなったと感じる場面が多くあった。</li> <li>単元の学習項目が、どの観点で評価されるかが明確になり、授業展開に加え試験問題作成に活かすことができた。</li> </ul>
課 題	<ul style="list-style-type: none"> <li>教科書の基礎的知識の定着や、主体的で多面的な視野が持てるようにすることがよりいっそう求められている。</li> <li>動画の視聴率は2割程度であり、効果的な活用には至らなかった。</li> </ul>
改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>実生活と結びつきの深い授業研究を行い、教員相互の意見交換や情報共有を行う場を設ける。</li> <li>生徒が自らの理解の状況を振り返り、自分の考えをまとめて意見表明をする場面などをより多く持つ。</li> <li>対面授業の予習・復習として活用できるオンライン教材開発を行い、学習環境の充実を図る。</li> </ul>

〈理科〉

<p>取 組</p>	<ul style="list-style-type: none"><li>・令和2年度のシラバスに沿った授業計画において、生徒の学習段階に合わせて定期試験の区切りごとに観点別の達成目標を決めて事前に定期試験を準備し、教員間で情報共有を行いつつ授業を行い、定期試験で達成度を評価した。</li><li>・感染症による特殊な社会状況の中で、理科としての役割として、各科目において、特に科学と人間生活の微生物、生物基礎の免疫の単元において、感染症や免疫などに対する正しい理解を科学的に深められるような授業を計画し実施した。</li><li>・商業高校で自然科学を学ぶことが最終になる生徒も多いことから、将来の健康や安全に役立つ授業内容となるよう授業を計画し実施した。</li><li>・ロボットプログラミングや走行モデル、鉄道運行プログラムなど、視覚的や体験的に学ぶことができる教育素材を準備し、授業を行った。</li></ul>
<p>成 果</p>	<ul style="list-style-type: none"><li>・科学と人間生活、化学基礎、生物基礎の一部で、生徒の学習段階に合わせて定期試験の区切りごとに観点別の達成目標を決めて事前に定期試験を準備し、教員間で情報共有を行いつつ授業を行い、定期試験で達成度を評価する取り組みを実施することができた。</li><li>・免疫の分野を休校中の事前課題として設定し、明けの時期により理解を深める授業を行うことができた。</li><li>・身近な例を具体的に紹介しながら授業を行った。</li><li>・ロボットを用いたプログラミングの試行錯誤をチームで行うことで、生徒の思考力や学ぶ力を発揮させることができた。また、車両模型の調整とコースタイム測定を繰り返し、走行と力学などとの関係を学ぶことができた。</li></ul>
<p>課 題</p>	<ul style="list-style-type: none"><li>・知識理解を問う問題だけになりがちであり、他の観点(思考・判断、技能・表現、関心・意欲・態度)にも立った、生徒の力を伸ばす目的に沿った取り組みが必要である。</li><li>・実験方法への制約がなければ、本来は、より実習や観察、データをもとにした視覚的・体験的で自ら学ぶ力を育てる授業の展開を工夫すべきである。</li></ul>
<p>改善策</p>	<ul style="list-style-type: none"><li>・シラバスと評価方法を一体に計画し、授業計画を行う。評価方法の一つである定期テストの計画的な作成を中心に評価方法を工夫する。</li><li>・SDGsなど社会的な課題も参考に、将来の生徒の健康や安全や社会貢献に役立つ自然科学の考え方や理解を学ぶことのできる、ICTも活用した視覚的・体験的・対話的授業の素材を用意し、実践する。</li></ul>

〈保健体育科〉

取組	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新型コロナ感染拡大防止ガイドに沿った、授業展開を実施した。</li> <li>・生徒が、安心安全に授業に取り組めるよう活動を実施した。</li> <li>・休校期間が長期化したこともあり、例年より、体育理論、体づくり運動を計画的に実施した。</li> </ul>
成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・選択種目が制限される中、生徒に主体的な活動実践させることができた。</li> <li>・新型コロナ感染拡大防止に努め、生徒の安全を確保することができた。</li> </ul>
課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現在のコロナ禍の中、選択制体育のさらなる充実を目指し、現状にそくした授業展開を考えることが必要である。</li> <li>・学習内容の制限の中、生徒の満足度を高めることが必要である。</li> </ul>
改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コロナ禍の中、生徒の意見を取り入れ、魅力ある授業づくりに取り組む。</li> <li>・何ができて、何ができないかを生徒に提示し、納得した授業展開を実践する。</li> </ul>

〈家庭科〉

取組	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「横浜市立学校の教育活動の再開に関するガイドライン」に沿ってコロナ禍における授業を展開した。年間授業計画を見直し、実習・実験の時期や内容を精選して実施した。</li> <li>・調理実習においては保護者の承諾書で実習参加の意思確認の上、衛生・安全面に十分留意して個人で行う活動を主に実施した。</li> <li>・民法改正に伴い、重点的な消費者教育を実施した。</li> </ul>
成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新型コロナ感染拡大防止に努め、生徒の安全を配慮した学習活動ができた。食品衛生など生活における感染予防のための知識の習得や意識の向上に繋がった。</li> <li>・消費者教育では県発行誌「JUMP UP」や視聴覚教材を用いて取り組み、各種契約やSNSなどの消費者被害の具体例等から実生活に活かす学習活動を実施した。</li> </ul>
課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コロナ禍において生徒にとってより体験的・主体的な学習となる授業内容の精選が必要である。</li> <li>・SNSの取扱いなど実生活の課題に合わせて、問題解決に向けて主体的に思考する授業展開の工夫が必要である。</li> </ul>
改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・衛生面・安全面において感染症予防を徹底した実習・実験など体験的・主体的な授業計画を行う。</li> <li>・実生活から自身の課題を見出し、生活の改善に向けて知識や技能の向上を目指した授業や実習を実践する。</li> </ul>

〈芸術科〉

取組	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新型コロナウイルスの感染症防止対策を講じながら授業を行った。</li> <li>・コロナ禍でも生徒が安心・安全に取り組むことができる内容を選び、生徒が興味・関心を持って取り組める授業を実施した。</li> </ul>
成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒の安全を確保した状態で、芸術のよさや美しさを理解させ、興味・関心を持って授業に参加させることができた。</li> </ul>
課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コロナの影響のため、授業時間や内容に制約があるなかでも、生徒の感性を伸ばすことができる授業の課題を設定、探求していく必要がある。</li> </ul>
改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コロナ禍でも生徒が芸術の良さや美しさを体験できるような授業計画を立て実践していく。</li> </ul>

〈外国語科〉

取組	<ul style="list-style-type: none"> <li>・進路希望の実現に向け、一人ひとりの生徒が力を伸ばせるよう、3年生ではクラス分けをし、授業展開をした。また生徒の必要に応じて、英検対策や共通テスト対策を行った。</li> <li>・4技能をバランスよく伸ばすため、1・2年生でリスニング教材を導入し、3年間通して定期的にプレゼンテーションを行うなど発表の機会を設けた。</li> <li>・新型コロナ感染症対策のため、長期休校期間中の課題の作成、動画の作成などを行った。また、オンライン授業に向けた取り組みを始めた。</li> </ul>
成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・クラス分けを行うことにより、きめ細かい指導が実現した。検定対策や共通テスト対策を行うことにより、傾向をつかみ、十分な問題演習もでき、進路実現に向けた実践的な力を身につけさせることができた。</li> <li>・リスニング教材の導入により、以前よりは音に対する意識は高まり、聞いて理解しようとする動機づけになった。プレゼンテーションを通して、意欲をもって積極的に活動し、工夫する姿が見られた。発表に向けた練習を行うことで、一人ひとりの能力の向上につながった場面も多々見られた。</li> <li>・継続的な学習習慣を維持できるよう、取り組んだ。</li> </ul>
課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・クラス分けや、リスニング教材の使い方など、検討の余地はあり、生徒の実態に合わせた方法を考えていく。</li> <li>・生徒一人ひとりの進路実現に向けた柔軟な対応ができるよう、授業改善や指導力向上などを心掛け、情報共有する必要がある。</li> <li>・ICT機器を活用した授業展開や観点別評価について、検討を続けていく。</li> </ul>
改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現代の社会において、様々なことを英語を通して学ぶことができるよう、話題の精選、関わり方など、現実在即して幅広く検討し、共有していく努力をする。</li> </ul>

〈商業科〉

取組	<ul style="list-style-type: none"><li>・学習習慣の定着や最後までやりきる力の育成を目指して、各授業を行った。</li><li>・各種検定への取り組みや成果を高めるために、朝夕の指導時間を多くとった。</li><li>・2年生「課題研究」の商品開発を目指すグループで、近隣の店舗とコラボレーションして、パンの研究・開発を行った。</li><li>・3年生「総合実践」において、例年以上のグループワークとプレゼンテーションを行った。</li></ul>
成果	<ul style="list-style-type: none"><li>・学習習慣の定着、やりきる力の育成は検定合格者数や合格率の向上に現れた。</li><li>・検定の合格者数、合格率とも例年以上の成果を上げた。特に全商簿記検定1級の合格率は50%を超えた。例年は30%程度の合格率であるため、令和2年度はかなり高い合格率となった。</li><li>・2年生「商品開発」における新商品開発は、実際に校内の購買部で開発したパンの販売を行い、生徒の反応も良かった。</li><li>・3年生「総合実践」でグループワークやプレゼンテーションの機会を増やした結果、大学入試のAO入試や企業面接などで、生徒が自信をもって取り組むことができるようになった。</li></ul>
課題	<ul style="list-style-type: none"><li>・引き続き学習習慣の定着、やりきる力の育成を目指すために、教科として毎回の授業に臨む必要がある。</li><li>・検定の取得に関して、全商検定よりも難度の高い国家試験である「日商簿記検定2級」や「ITパスポート試験」への挑戦を行う必要がある。</li><li>・令和4年度以降の新学習指導要領のスタートに向けて、地域との関わりを高めるために、地域との関りを深め、「地域課題」などを明確にする必要がある。そうした「地域課題」を学校全体として取り組んでいく必要がある。</li></ul>
改善策	<ul style="list-style-type: none"><li>・自宅での学習習慣の定着のために、ICT環境を整備し、その活用法を構築していく。</li><li>・高度な資格取得のための道筋を明らかにするため、入学時からの取り組みを示したものを作り上げ、明示していく。</li><li>・地域との交流機会を設け、話し合いの場を多く持ち、「地域課題」を明確にするための活動を実施していく。</li></ul>

## □特別活動・部活動の状況

(関連アンケート番号：教職員 7, 8、生徒 2, 3、保護者 3, 4)

取組	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒が自ら主体的に活動することができる支援体制の確立。</li> <li>・生徒会活動が十分に行うことができる環境の整備と支援体制の確保。</li> <li>・行事の持つ教育的側面がより充実する活動及びそのための準備期間の確保。</li> <li>・学校全体でより良い生徒会活動が出来るような連携体制の確立。</li> </ul>
成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・特別活動においては、生徒・保護者・教職員ともに、良い活動であると8割の方に評価されている。令和2年度は、コロナ禍で生徒会活動が制限される中、工夫を凝らし、活動できたことが大きいと考える。</li> </ul>
課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・毎年の課題であるが、生徒自身が主体的な活動を行っているという意識が約7割と低いことが令和2年度も課題として残った。しかし、執行部が、現状を変えようと令和3年度に向けて動き出している。どのようにサポートしていくかが、今後の課題である。</li> </ul>
改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒会委員会活動の見直しを行う。多くの生徒が委員会活動に参加できる体制で令和3年度の委員会活動を行う。具体的には、執行部中心の活動から、各委員長を中心とした活動を目指す。</li> </ul>

## □生徒指導・教育相談の状況

(関連アンケート番号：教職員 9、生徒 4, 5, 9、保護者 3, 5)

取組	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒一人ひとりが安心して学校生活を送れるように、カウンセラーを含め、誰にでも相談ができる体制をとった。</li> <li>・日常生活におけるルールやマナーを守り、他に迷惑をかけたり、嫌な思いをさせたりしないよう、日頃から生徒に対して声掛けをしてもらえるよう協力をお願いした。</li> </ul>
成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「本校の生徒であることを誇りに感じている」（生徒9）で、80%以上の生徒が概ね肯定しているように、学校に目を向け一生懸命に活動していることが伺える。</li> <li>・「生活習慣や規範意識を身につけるための適切な指導が行われている」（保護者5）及び「生徒の生活習慣の確立や規範意識の形成に向けて、適切な指導を行っている」（教職員9）から、家庭や教員が生活保健指導部の指導内容に理解をいただき、協力をしてもらった結果ととらえる。</li> </ul>
課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・頭髪を染めるなど、本人や家庭に判断が委ねられている事項については、Y校生としての自覚が少々足りないと感じる。</li> </ul>
改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・頭髪などは、根気強く指導していくのかルール化していくのかを検討する必要がある。</li> </ul>

## □進路指導の状況

(関連アンケート番号：教職員 10、生徒 1、6、保護者 6)

取 組	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 2年生全体では進路の日を設け、民間就職希望者には各種試験を実施するなどして就職に対する理解を深めさせた。また、2年生の段階で就職を希望する生徒に対しては就職学習会を2回行い、職業人になる自覚を求める指導を行った。3年生には毎週1回就職説明会を設け、第一希望で内定できるようきめ細かな指導を行った。また、内定後も卒業時までの間、就職セミナーと産業カウンセラーとの相談会を実施した。</li><li>・ 各学年担当者を中心に、各学年の進路ニーズに対応した取り組みを導入し、進路ガイダンスがより効果的になるように運営をした。</li><li>・ 大学共通テストや新入試に関する情報提供を細目に行った。</li></ul>
成 果	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 2年生での進路の日に実施した各種検査結果を知ることによって、やるべきことが見えた生徒が多かった。3年生での就職説明会を充実させた結果、1社目の就職試験で80%の生徒が採用内定を決め、11月の時点で就職を希望する生徒全員が内定を受けた。</li><li>・ 入試において検定資格が出願条件になった大学があり、生徒は例年以上に資格検定への取り組みが早くなった。また、オンライン面接などこれまでなかった対策を検討し、放課後等にガイダンスを開くなどして対応した。</li><li>・ 進路の日は進路ガイダンスとは異なり、個々の生徒が模試、適性検査およびガイダンス、専門学校訪問を選択し客観的に進路に取り組む意識や能力を育てることを目的としている。令和2年度は検定対策を盛り込んだことで、資格検定と進路指導を紐づけた取り組みをした。</li></ul>
課 題	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 近年の企業は、きびしい企業競争が続き、新商品の開発力など問題解決力を備えた意欲ある人材を求めている。経営者と一緒になって企業の課題を見つけ、そしてそれを解決できる人材の育成にさらに取り組み、1社目での内定率をさらに高められるよう、2年生の早い段階からキャリア教育を充実させる必要がある。また、3年生では途中からの進路変更による民間希望生徒への短い期間での就職指導の工夫が求められる。</li><li>・ 令和2年度は新型コロナウイルスにより、上級学校訪問や進路ガイダンスが実施または縮小して実施となった。また新しい大学入試制度の初年度とも重なり3年生にとっては厳しい年となった。</li></ul>



改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・企業の求める人材像を理解させ、日々刻々と変化する時代に即応した能力を育成させる必要がある。3年生での企業研究に重点を置くとともに、1・2年生へのキャリアプランニングに工夫を凝らし、3年間を通しての進路指導体制をさらに充実させていく。</li> <li>・令和3年度も進学関連のイベントの中止や縮小が見込まれ、生徒にとって進学先の十分な情報が得られにくいのが、進路ガイダンスだけではなくLHR等においても生徒と上級学校の接点となる講演会を開いていきたい。</li> </ul>
-----	---

### □保健指導及び環境美化の状況

(関連アンケート番号：教職員 11, 12、生徒 7, 8、保護者 7, 8)

取組	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新型コロナ感染症予防の観点から、自己の健康管理に加え感染させない集団作りに重きをおいた。手洗いや消毒はもちろん、自己免疫を高めておくことの重要性についても啓発した。</li> <li>・環境美化においては、美化保健委員を中心に朝の清掃活動や、ごみの分別活動に励んだ。コロナ感染症予防のため、ごみは基本的には持ち帰るよう指導した</li> </ul>
成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・さくら連絡網を利用して、毎日の健康観察（体温測定）を習慣化する指導を行い、体調不良者等への追跡調査を行った。そのためか令和元年度に比べ、「学校は生徒の健康管理について適切な指導をしている」（生徒7・保護者7）の肯定的回答が上がっていると考えられる。</li> <li>・ゴミ箱を設置していなくてもごみを放置することも見られず、感染予防の目的を理解している様子が伺えた。</li> </ul>
課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分で自分の健康管理を行うという意識の低さがみられる。</li> <li>・ゴミ箱がなくて不便だという声もある</li> </ul>
改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・粘り強く啓発活動を続けていく必要がある。</li> <li>・消しカスや清掃活動で出るごみもあるため、どこか指定場所等でゴミ箱の設置が必要かを検討する。</li> </ul>

## 3 学校経営の状況

### □教育目標等の設定・実施状況

(関連アンケート番号：教職員 13、生徒 9、保護者 1)

取組	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本校の教育目標の実現を目指し、教育課程委員会を中心にグランドデザインに基づいた新教育課程の編成を進めた。</li> <li>・課題解決的な学習や、外部指導者による講演、SDGsの取組みなどを通してビジネス教育、国際理解教育等を推進した。</li> </ul>
----	---

成 果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新教育課程の編成を計画通りに進め、12月には教育課程の骨組みが完成した。また、教育課程編成において各教科で、新学習指導要領の内容理解を深めることができた。</li> <li>・持続可能な社会の実現を視点とした学習や活動が見られる場面が増え、問題解決能力の育成にもつながっている。</li> <li>・新型コロナウイルス感染症等拡大防止による臨時休業の中でも教職員が「Y校の生徒に何を教えなければいけないか」に重点を置いた教育に取り組み、「学びを止めない」ことを意識した教育活動を行うことができた。</li> </ul>
課 題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・GIGAスクール構想の実現に向け、環境の整備とICTを活用したより効果的な授業研究等が必要である。</li> <li>・授業における教育目標の意識の差が職員間で大きい。</li> <li>・生徒一人ひとりのつまづきを拾い上げ丁寧に支援することと、教育目標に沿った生徒の育成との両立が難しい。</li> </ul>
改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・令和3年度の学校内の授業研究の視点をICTの活用とするなどして年間を通して組織的に授業改善に取り組むなどの工夫をする。</li> <li>・教育課程委員会主催のワークショップ等を行い、「Y校に求められる学校像」や「Y校を希望して入ってくる生徒の実態」「3学科・4教育課程における教科としての留意点」等共有する機会を持ち、自分の授業を通してY校の生徒をどう育てるべきかを話し合う。</li> </ul>

## □組織運営及び教職員研修の状況

(関連アンケート番号：教職員 14, 15, 16, 17, 18)

取 組	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒の多彩なキャリア形成を育成するべく、校務分掌を再編成した。</li> <li>・メンターチームを実施し、教科を横断した授業展開の意識や教育技術の学びあい、また自己開示のできる教職員集団作りを実施した。</li> <li>・ミライムを導入したことで、朝の打ち合わせを必要時だけにするなど会議時間の短縮を図った。</li> </ul>
-----	---

<p style="text-align: center;">成 果</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・進学指導部と就職指導部を統合し、新たな部を設置したことで、総合的な探究の時間等教育活動を通じたキャリア形成の意識を高める体制づくりができた。また、出口指導に重きが置かれる進路指導については、自分づくりパスポート等により、小中からつながっているキャリアとしての認識を広げることができた。</li> <li>・メンターチームでの研修を通して、授業を見合う雰囲気や自分の授業力向上を図ろうとする意識をつくることができた。教職員集団のなかでも「わからないことがわからない」ことや「助けてほしいと言っているのかわからない」などの困り感がありその困り感を拾い上げることで生徒指導等に活用できるようにした。また、東京学芸大学大学院との連携を図ることで、有意義な助言、励まし等を受け充実度を高めることができた。</li> <li>・ワークライフバランスが叫ばれる中、会議時間の短縮は喫緊の課題であったが、ミラ임을活用することで細かな意思疎通を図ることができるようになった。また新型コロナウイルス感染症等拡大防止のためにも会議の削減は有効であった。</li> </ul>
<p style="text-align: center;">課 題</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・指導者によって評価の在り方が大きく変わることはないよう、新学習指導要領に基づく、観点別学習状況の評価の捉えを各教科内、科目内等で十分に共有、統一することが求められる。</li> <li>・進路にかかわる部の新しい方針については、見通しと振り返りを大切にしたキャリア教育の推進の視点から、旧進学指導部・就職指導部を統合した良さを生かし、生徒の個性を伸ばさせるものにすべきである。</li> <li>・総合的な探究の時間についても、教育課程が4つに分かれているため、その統合が難しい。育てたいY校生像を意識した教育課程の策定が望まれる。</li> <li>・授業だけではなく、相互に助け合える教職員集団づくりのためにメンターチームの存在をY校内で位置づけ、どの職員も関われるような存在にしていきたい。</li> </ul>
<p style="text-align: center;">改善策</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教科、科目内で評価規準（B）を共有し、Aの姿に共通するキーワードなどを出し合ったり、評価方法を検討したりする研修会等を実施し、評価力を高める。</li> <li>・進学と就職を併せた部の校務分掌等については、引き続き検討が必要であることと、この指導部がフレキシブルな教育課程を作り上げていく中心となることを意識させ、学年・教科・経営会議等との連携を取っていくようにする。</li> <li>・メンターチームについては、管理職からの広報等、このチームに参加することの意義とその成果を見えるようにしていく。</li> </ul>

## □学校経理、施設・設備及び情報の管理状況

(関連アンケート番号：教職員 19, 20, 21, 22、生徒 10, 11、保護者 8, 9)

取組	<ul style="list-style-type: none"><li>・限られた予算を適切に執行するとともに、安全・安心が担保された教育環境の実現を図る。</li><li>・個人情報や特定個人情報（マイナンバー）の取り扱いに関しては、担当職員の研修を実施するとともに、事務室及び校内のセキュリティ強化を図る。</li></ul>
成果	<ul style="list-style-type: none"><li>・他の所属から不用品を譲ってもらうことで経費執行の縮減に日常から取り組んでいる。</li><li>・修繕案件は危険度などを考慮してプライオリティをつけ、限られた予算のもと効率的な執行を実現できている。</li><li>・令和2年度より機械警備を取り入れ、教員の執務室の鍵をピッキングされにくいものに更新するなど、セキュリティの強化に努めた。</li><li>・経年劣化が進んでいる外壁改修については商業棟・体育棟について令和2年度に施工を実施し、漏水防止が期待される。</li></ul>
課題	<ul style="list-style-type: none"><li>・竣工後35年近く経過している校舎であるため、目に見えない躯体内部の老朽化は進行しており、大型修繕が必要な状況である。</li></ul>
改善策	<ul style="list-style-type: none"><li>・故障してからの工事は費用も多くなるため、状態を見極めて、故障や破損に至らないレベルでも予防的に施工することを検討する。</li><li>・大規模修繕が必要なものについては、引き続き教育委員会へ粘り強く訴えて適切な維持管理に努める。</li></ul>

## □保護者・地域との連携協力状況

(関連アンケート番号：教職員 23, 24、生徒 13、保護者 10)

取組	<ul style="list-style-type: none"><li>・保護者との連携</li><li>1. 年3回発行されるPTA広報委員会による「PTAだより」は学校の教育活動を保護者へ伝える媒体として貴重なものであるため、その内容の充実を図るための連携協力をした。</li><li>2. PTA成人委員会による「施設見学会」やその他企画は保護者の学校理解のために有効なものであり連携協力をしている。(令和2年度はコロナ感染防止のため「施設見学会」は中止)</li><li>3. Y校祭でのPTA活動の場であるバザーや無料休憩所の企画運営に協力をする。(令和2年度はコロナ感染防止のためY校祭は中止)</li><li>4. Y校おやじの会による月1回の環境整備活動を行った。</li><li>・地域との連携</li><li>1. 「わがまちの学校づくり推進会議」を通じて、地域と連携して活動を行った。</li><li>2. Y校祭において、生徒会の「地域交流局」の生徒の協力のもと、地域ステージ発表や南区スポーツ推進協議会による「さわやかスポーツ」の運営の協力をしている。(令和2年度はコロナ感染防止のためY校祭は中止)</li><li>3. 地域清掃を大掃除及び美化委員会による特別清掃活動として行った。(令和2年度はコロナ感染防止のため活動中止)</li></ul>
成果	<ul style="list-style-type: none"><li>・保護者との連携</li><li>「PTAとの連携・協力の推進が図られている」(教職員23)の高い評価に見られるように、本校のPTA活動をはじめとする保護者の諸活動が、教職員との連携・協力のもとに活発に行われた。</li><li>・地域との連携</li><li>令和2年度は書面での情報交換になったが、「わがまちの学校づくり推進会議」を通じて地域との連携に引き続き取り組み、「学校の教育活動の情報提供・説明が十分になされ、活動に対する理解が得られている」(教職員24)の高い評価が得られている。</li></ul>
課題	<ul style="list-style-type: none"><li>・「学校の様子を家庭への配布資料や学校のホームページなどを通じて十分かつ適切に伝えている」(保護者10・生徒13)の高い評価に見られるように、このコロナ禍で今後もホームページ等を活用して情報を発信していきたい。</li><li>・「横浜商業高校らしい地域連携活動」を、地域の方々にさらに理解していただくことが課題である。</li></ul>

改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ホームページ作成担当と連携してホームページの更新を増やして学校の情報を伝えていく。</li> <li>・わがまちの学校づくり推進会議や南区の地域振興課と協力して横浜商業高校らしい地域連携活動を行い、地域の方々に理解していただくようにする。</li> </ul>
-----	--

## □危機管理状況

(関連アンケート番号：教職員 25, 26、生徒 12)

取組	<ul style="list-style-type: none"> <li>・津波警報、大津波警報の発表に備えて、第一学年が、避難場所である清水ヶ丘公園まで徒歩で移動する訓練を実施した。</li> <li>・新型コロナウイルス感染症等拡大防止のため、教職員や生徒が安心して学校生活を送れるような環境を整備した。</li> <li>・生徒が安全・安心に登校し学校生活を送ることのできるよう教育委員会・児童相談所・警察等外部機関と連携し丁寧な支援を行った。</li> </ul>
成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実際に歩くことで学校外にある避難場所とその経路、所要時間等の確認ができた。</li> <li>・SKC（消毒キットセンター）を設け、校内消毒の意義と必然性を高めるとともに、昇降口での非接触型体温計やアルコール消毒の設置、さくら連絡網を活用した健康観察の実施など生徒・保護者が安心して学校に通学できるような細かな配慮ができた。</li> <li>・新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、教育委員会・区保健福祉センター等と細かに連絡をとり部活動停止や臨時休業など早急な対応をおこなった。</li> <li>・生徒・保護者の危機管理対応についても、当事者の心情に寄り添い、関係機関と連携を取るなど迅速かつ適切に対応を行うことができた。</li> </ul>
課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・刻々と変わる新型コロナウイルス感染症等対策の中、どこまでが安全な教育活動として行えるのかということについてはいまだ持って不明確かつ見通しが無い。</li> <li>・生活指導部を中心とした問題行動対応については、学年や生活指導部での情報共有が遅くなることでの初動対応の遅さが悔やまれる。</li> </ul>
改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新型コロナウイルス感染症等対策については、現在の対策である密を防ぐことや、消毒、換気、マスク着用などの徹底が効果的であると思われるので、習慣化していく。</li> <li>・生活指導部内の内規の改定等の作業を通し、迅速に情報共有し初動できるシステムが作れるよう指導をしていく。</li> </ul>

## □学校に関する情報公開の状況

(関連アンケート番号：教職員 27、生徒 13、保護者 10)

取組	・学校ウェブページを CMS に切り替えて、保守性・更新性を高めるようにした。
成果	・教職員・生徒・保護者ともに「そう思う」「ややそう思う」を合わせると 80% を超えているので、おおむね目的は達成されている。
課題	・生徒・保護者の「ややそう思う」が「そう思う」になるようにすることである。
改善策	・頻度の多いウェブページの更新や年間を通しての学校だよりの掲載が必要なことに異論はない。一方で、質問にメール配信システムについて触れることで、保護者へ改善を訴えることができるため、考えていく必要がある。

## 4 いじめへの対応に関する項目

### □いじめへの対応

(関連アンケート番号：教職員 28、生徒 5、保護者 3)

取組	・毎月、いじめ防止対策委員会を開き、各学年・カウンセラーから情報を挙げてもらい、早期発見・早期対応に取り組んだ。 ・「いじめ解決のための生活アンケート」を実施し、結果及び分析を全職員で共有した。
成果	・些細なことでもいじめとして認定し、早期に学年を中心に解決に向けて取り組み、生徒が安心して生活を送れるようにした。 ・アンケートは無記名式だったが、個々に気になる生徒がいるような場合は、担任を中心に相談や聞き取りを行い、早期発見・解決の対応に積極的に取り組むことができた。
課題	・「学校はいじめや差別を許さない環境作りに努めている」（生徒 5）で約 16% が否定的である。これは、自らが被害者なのか、第三者として見ての判断なのかはわからないが、生徒同士の関係が必ずしも常に良好なものとは限らず、教員から見えない部分や生徒個人の感じ方でも数値が上下してしまうと思うので、考えられる要因を無くしていくことが必要である。
改善策	・クラス・学年・学校のそれぞれの単位で、互いの違いを認め合う心を持って相対する行動が身につけられるよう、他部署の行事等を通して協力していく。